

ひと

「子どもの死」を検証する制度の導入を訴えてきた

よしかわ ゆうこ
吉川 優子 さん(49)



「出張に行っています」

長男の慎之介君は2012年7月、パパをまねておどけて出かけたまま、帰ってこなかった。住んでいた愛媛県西条市の私立幼稚園のお泊まり保育での水遊び。川で流されて水死した。5歳だった。救命胴衣をつけていなかった。

なぜ死んでしまったのか。園側は口をつぐみ、市や県、文部科学省、消費者庁に事故調査を求めた。「権限がない」と言われた。「自分たちでやるしかない」。独自に調査委員会を立ち上げた。

園長が有罪となった刑事裁判や損害賠償が認められた民事訴訟の結果も待たず、14年には会社員の夫(51)と一般社団法人「吉川慎之介記念基金」を設立し、学者や弁

護士らと「日本子ども安全学会」

をつくった。救命胴衣の普及啓発に力を入れ、予防のために事故や事件の教訓を共有する検証制度の必要性を提唱してきた。

「慎之介の命を生かしたい」。その一心だった。「感情に負けそうになるときもある。でも、同じことを繰り返さない。それに尽きる」。美大時代にデッサンでたつきこまれた物事を俯瞰する力で運動の一翼を担った。念願の、子どもの死亡検証制度は国が導入をめざしてモデル事業を展開中だ。

慎之介君がくれた出会いがあり、ここまで来た。自宅に飾るたくさんの写真の中の息子は5歳のままだが、これからもともに歩む。 文・大久保真紀 写真・池田良